

俳句と俳句結社にみるハワイ 日本人移民の社会文化史¹⁾

島田法子

序

本論は第二次世界大戦前半世紀のハワイにおける日本人移民による文芸活動、とくに俳句結社の発展を通して、日本人移民の文化変容の歴史の一側面を読み解く作業を行う。ハワイの日本人移民の文芸活動を社会史、文化史の視点から分析した研究はほとんど無い。唯一、篠田左多江の論文があるが、尾籠狂花（森うしほ）を中心に1910年代頃の文芸活動全般を取り上げたもので、俳句と移民史を結び付けた考察は一部に限られている。

特に俳句に注目する第一の理由は、ハワイの日本人移民のあいだでは、相賀安太郎の言葉をまつまでもなく、文芸のなかで「俳句が最も普遍的」で、早くから移民たちのあいだに普及していたからである（695）。短歌や小説の創作活動は少し遅れて発展し、また小数の比較的教養のあるものに担われていた。移民史と関連づけて文芸活動をたどるには俳句に注目するのが最適である。俳句が比較的習得しやすい平民文学であり、創作に時間がかからず長時間労働に追われる労働者にも可能な文学であり、かつ移民の母体である日本の農民に親しまれてきた歴史があるからである。第二の理由は、俳句が季題を使うという制約をもった文学だということである。日本で成立した季題がハワイという土壌で、いつごろ、どのような過程を経て変容したかに着目するなら、日本人移民の文化変容を読み取ることができるであろう。

まず背景として、初期の日本人移民の歴史を概観しておきたい。日本人のハワイへの移住は、明治元年に移住した「元年者」と呼ばれる約150名の移民を別として²⁾、本格的な移民が開始されたのは1885年で、日本とハワイ王国とのあいだで正式に交わされた政府間約定書に則ったいわゆる「官約移民」とよばれる契約労働移民であった。当時ハワイではサトウキビ産業が隆盛となり、サトウキビ・プランテーションでは労働力が大幅に不足し、日本人農民は理想的な労働力供給源とみなされた。移民船シテイ・オブ・トーキョー号が第1回の官約移民をホノルルに運んでから1894年までの9年間に、約28,000人の日本人が契約移民として海を渡った。ところが1893年にハワイ王国がアメリカ人入植者によって転覆させられ消滅してしまったため、移民事業は日本政府の手を離れ、1894年からは民間の移民会社に委ねられることになった。移民会社の斡旋による移民は「私約移民」と呼ばれ、その総数は、契約労働が禁止される1900年までに約46,000人に達した。1898年、ハワイはアメリカ合衆国に併合され、1900年には基本法制定によって合衆国の準州

となったため、合衆国憲法の下に契約労働制度は違法となった。1900年以降の移民は契約に縛られない「自由移民」と呼ばれ、日米紳士協定が締結される1908年まで続いた。この間に約68,000人がハワイに渡航した。その後、1924年の移民法によって日本人移民が全面的に禁止されるまでの期間は「呼び寄せ移民」の時代と呼ばれ、多くの「写真花嫁」をふくむ血縁者62,000人がハワイの土を踏んだ³⁾。

初期の日本人移民にとって、ハワイ移住はあくまでも錦衣帰郷を目的とした出稼ぎであって、ハワイでの生活は一時的な腰掛にすぎなかった。特に官約移民の時代には、移民たちはハワイ到着後すぐに契約先のプランテーションに分散、配置され、激しい労働に明け暮れる日々で文芸活動に時間を割く余裕はなく、また文芸に関心を持つ者は少なかった。「教養が低く、風習も乱れ勝ちで、その生活状態も薄給に起因して、極めて低級であった事は否定できない」(ハワイ日本人移民史 268)。この時代には、文芸活動が生れる素地はなかったといえよう。川添樫風も同様の解釈をしている。「…1885年、布哇[ハワイ]に第一回官約移民が来た時から十数年の間に所謂文芸熱と云ったものは生れ」なかったと(『移植樹』318-9)。しかし日本人移民社会は未成熟ながら官約移民時代にすでに形成されつつあり、社会的諸制度が成立しつつあった。メソジスト派牧師美山貫一の影響で1887年には慈善団体「日本人救済会」が、1888年には「在布哇日本人禁酒会」が組織されたし、早くも1892年には最初の日本語新聞が刊行され、翌1893年には最初の日本人学校がハワイ島コハラで始まった。会衆派牧師神田重英が公立学校の校舎を借りて開校したもので、生徒数30余名であった。

私約移民の時代に入ると日本人人口は急速に増えていき、契約期間が終った農民がホノルルやヒロといった都会で転職し、また契約労働以外の目的で渡航する日本人も増えて日本人街が形成されていった。1896にはホノルル日本人医会が、1900年にはホノルル日本人商人同志会が誕生した。自由移民の時代に入るとハワイの日本人人口は61,000人を超え、日本人社会の機能はさらに複雑化し、さまざまな社会制度の発達をみるようになった。商人、宗教家、教育者、医師、官吏等の渡航者も増え、文芸の素養のある人口も増えていった。発行される日本語新聞や雑誌も増え、寺院や神社の設立も相次ぎ、日本人学校も次々と創設された。そのような日本人社会の発展を背景に、ハワイ日本人移民の文芸活動が生まれていった。

1. 俳句結社のはじまり

1-1 日本語新聞

俳句結社の発展にとって特に重要な鍵を握ったのは日本語新聞の刊行である。日本人移民のあいだでは識字率が比較的高く、日本人は「3人寄れば新聞を出す」といわれたほど、新聞を読んだり、文章を書いたりすることに違和感のない移民であった(白水 229)。ハワイにおける日本語新聞の嚆矢とされるのは、1892年6月に創刊された『日本週報』というガリ版刷の週刊新聞である。その後も続々と新聞の創刊が続き、白水繁彦の研究によると、消長が激しかったものの1907年までの15年間に週刊、隔日刊、日刊を含めて約30紙近くが刊行されたという(238)。新聞は情報の伝達や啓蒙の手段となっただけでなく、日本人移民に娯楽を提供し、移民たちの思いを託した文芸作品の発表の場ともなった。小林荔枝は、ハワイにおける日本語新聞と俳句の関係につい

て次のように述べている。「草分け時代を経て1894年（明治27）私約移民の渡航が始まると、学のある移民の数も増える一方数多くの日本語新聞が発行され、紙面に募集句を掲載するに及び布哇の俳句は俄かに活況を帯びるに至った。」と（37）。

最初の文芸欄がどの新聞にいつ頃設けられたのか明らかでないが、相賀安太郎の『五十年間のハワイ回顧』によると、「特に文芸欄といふものはその時代〔1905年頃〕の邦字紙上には無かったし、短歌などは余り流行ってゐなかつたが、俳句は相当盛んで、やまと新聞には、常に物外〔奥村物外〕、蘇烟〔野村蘇烟〕両氏の選に成る募集句が、紙上を飾って居り、却々佳句が多かつた。」という（179）。『やまと』が創刊されたのは1895年で、『やまと新聞』と改題されたのが1896年、相賀が『やまと新聞』を買収したのが1905年で、それを『日布時事』と改題したのが1906年11月であったから、すでに1900年代初期に俳句が相当盛んになっており、1905、6年頃の『やまと新聞』には常時移民が創作した俳句が掲載されていたということになる⁴⁾。

草創期の日本人移民の文芸の歩みを伝える資料に、1900年に出版された藤井玄暎の『新布哇』がある（藤井秀五郎）。日本人社会の諸活動が紹介されているが、第二十一章「文苑」の中に俳句も掲載されている。これらは新聞に掲載されたものから採録されたものであろう。天長節に遠く故郷を偲んで詠んだ「幾千里隔てて菊の薫りかな（桑原）」など、ハワイの移民の生活を思わせる句も僅かにみられるが、下記のように、ほとんどの句はハワイで詠んだとは思えない句である（645）。

雑木山皆うれうれし霜の色 亦痴
見送や尾花わけ行く檜木笠 一指
古寺の鐘の響や桐一葉 湖舟

雑木山の霜や、尾花と檜木笠、古寺と桐一葉といった語句が、ハワイの風土を背景にしているとは思われない。一般的に、この時期俳句を詠んだ移民たちはまだハワイの生活体験やハワイの情景を詠むことを試みていない。俳句と向かい合ったとき、往々にして彼らの意識はハワイではなく祖国にあったことを示している。ヒロの俳人出川紫洞のいう「日本趣味」俳句の時代であった（20）。

1-2 エワ土曜会

俳句結社として記録に残っている最古の組織は「エワ土曜会」で、奴の奴という俳号をもつ石栗半九郎が創設したものであった。エワはホノルルから真珠湾を大きくはさんだ西側の農村地域で、エワ・プランテーション会社が経営する大規模なサトウキビ・プランテーションがあり、多数の日本人が働いていた。石栗自身がプランテーション労働者の一人であった。ハワイ俳壇ではよく知られた人物で、川添樗風は『移民百年の年輪』の中で「蔗の中の俳句結社と奴の奴」と題して次のように紹介している。多少長くなるが引用してみよう。

奴の奴と云う珍しい俳名で知られた石栗半九郎氏は…鬱勃たる雄志に燃えてハナ夫人同伴1899年（明治32年）に來布、オアフ島エワに在住36年間の後、1935年（昭和10年）錦衣帰国、1941年（昭和16年）2月故山で逝く、享年67歳。…

その郷里〔新潟〕は昔から俳句の盛んな土地柄で、十五歳の時からこの道に入った。…彼の仕事着のポケットの中には、いつも句帳が入っていて、熱心に句作を続けた。

1900年（明治33年）頃の耕地生活を顧みると、日本人労働者達はまるで奴隷のように酷使された。又労働者の中には無学文盲、教養の低い人達も多いので、石栗氏は彼等が日本に出す手紙の代筆を毎夜、二三通は欠かさなかった。…

この奴の奴氏を先生にエワの殺風景な甘蔗畑の中に、情緒ゆかしい俳句結社土曜会の生れたのは1901年（明治34年）であった。恐らく布哇における最初の俳句結社であろう。

土曜会はその名のように毎週土曜日の夜、奴の奴氏宅で定期的に催された。石栗夫人手製のヨウカンに舌つづみを打ち、席上運座あり、角力句あり、折句あり興の赴くに委ねて夜の更け行くを忘れ、鶏鳴をきいて散会するなどのことも度々であった。…（194-5）

エワ土曜会は労働者たちを引き付けたようで、5年後の「1906年ごろ、会員は十数名」いたという（ハワイ日本人移民史 506）。当時のプランテーション労働者の待遇は劣悪で、石栗の住居もあばら家に近かったであろうが、土曜の夜、彼の家は人で溢れていたことであろう。石栗は俳句の宗匠として尊敬された。石栗の弟子で、『椰子の花』（1963）という句集を出版した渡辺芳月は、「私が布哇に渡航した時、入植先であるエワ耕地には漢学者であり俳句の宗匠であった石栗奴の奴と云ふ先生が居り、私はこの先生に俳句の手ほどきを受けた。」と思い出を記している（59-60）。また親友であった秦桑邨（秦是道）は⁵⁾、「生き仏の如く、布哇同胞の凡てから慕われ、その温情と高い人格とが、万人の尊敬を集め得て『エワの聖人』と詠われた」と述べている（224-5）。石栗が詠んだ句の多くはまだ「日本趣味」の範疇にあるが、以下にハワイらしい句を挙げておこう（小林 40）。

夏稼ぎ手に豆出して戻りけり⁶⁾

任満ちて島去り惜しむ春の海

日本人移民の文芸活動がサトウキビ・プランテーションで苛酷な労働を強いられていた農業労働者のあいだから生れたということは注目に値する。石栗は24歳の若さで契約労働者としてハワイに渡航してきた農民であり、経済的に豊かな階層の出身ではなかったであろうが、漢文をたしなみ俳句の指導ができるだけの教養人であった。当時日本の農村の青年たちが雪深い冬の夜に炬燵をかこんで句会を開くという風習は広く見られたというから、新潟の農村出身の石栗は故郷におけるのと同様に、エワ・プランテーションでも働く青年たちを集めて句会を催したのであろう⁷⁾。

初期のプランテーションの労働者たちにとって俳句を詠むことにはどのような意義があったのだろうか。娯楽が少なく、飲酒や博打にのめり込む労働者が多かったなかであって、俳句結社は健全で向上心のある者たちの集まりであり、俳句結社に加入することで得られる所属感、同好の友人と夜更けまで語り合う楽しみは大きかったであろう。厳しい労働に耐える力を与えてくれたのではあるまいか。また自己表現の喜びや新聞や雑誌に自分の俳句が掲載される楽しみや誇りは他に替え難かったであろうし、「日本趣味」の俳句を詠むことは、日本人としてのアイデンティティ維持に役立ったことであろう。移民たちを指導してきた荻原井泉水は、「昔はまことに窮乏と労役とそして移民というコムプレックスのもとにどれだけ苦しんだことか。そうした生活の中であって、俳句に愛好をもつものが集まって句会を作った。…この俳句生活はあたかも砂漠の中にある一つのオアシスのように、いかに彼等にとって慰めとレクリエーションになったことか。」と分析している（秦 2-3）。

1-3 ヒロ蕉雨会

上述のように自由移民時代にはホノルルやヒロの日本人人口が増加し、都会でも俳句結社が創設された。ホノルルでは「水無月会」という俳句結社が生まれたがまもなく活動停止したようである（「現今の布哇俳壇」）。水無月会のすぐ後、ハワイ島のヒロでも俳句結社が誕生した。1903年創設された「ヒロ蕉雨会」は現在も続いており、百年を超える歴史をもっている。中野次郎によると、田中滴水や永見古萩ら数名の俳人がホノルルからヒロに移り、1903年に句会を始め、一年後には多くのヒロの素人が参加するようになり、蕉雨会を立ち上げたという（Nakano）。創設の時期や同人については異論がある⁸⁾。創設の頃からの同人であった出川紫洞は、ヒロ蕉雨会の歴史を回顧して次のように述べている。

ヒロ蕉雨会は、明治三十四五年頃 [1901、2年頃]、伊藤花影、松林露泉、坪井鬼木、其他二、三の俳人に依り、日本趣味正風派の俳調を鼓吹され、毎月一回乃至二回会合して、俳論を交換したるに始まる。爾來会員の出入等因り、時に消長ありしが、而も連綿として蓮の糸の夫の如く、又芭蕉葉の雨にも似たり。当時ヒロ市及近郊には、格段師と仰ぐべき俳匠とてなかりしより、在ホノルル市の木公舎半六、野村蘇烟、奥村物外及元島明々等の諸氏に選評を仰ぎ、各々鳥なき里のあやしき夜陰に蝙蝠の跳梁を極めて、独り悦に入りたるものなり。
(20)

エワ土曜会と対照的に、ヒロ蕉雨会の創設者はいずれもヒロという都会の住人で、プランテーション労働者ではない。伊藤花影はヒロ新報記者、出川紫洞はヒロ日本人社会の成功者で指導者であり、松林露泉は鍼灸師であった。創設の翌年に参加した前原一星（横山松青）はヒロ郵便局の日本人係をしていた（齋藤「ヒロ」；横山 303）⁹⁾。

残念ながら発足当時のヒロ蕉雨会の句会記録はみつかっていない。しかし彼らが「日本趣味」の句を詠んでいたことは、蕉雨会同人の村上紅嵐の証言から明らかである。すなわち村上は1930年代後半に、蕉雨会の初期の歴史を調べた結果、「四十年前の布哇の俳壇の模様を記録に依って探って見ると布哇の句なんか全く見つからない。」と述べている（27）。彼らが日本の季題を使って記憶の中の日本の情景を詠う「日本趣味」を脱して、ハワイの俳句を詠むようになるのは、下記の第一期黄金時代を迎えてからである。出川も「其後、田島断、早川鷗々氏等の編纂になる、布哇歳時記の出るに到り、蕉雨会の俳境も随而其環境に遷る。」と証言している（20）。

1-4 まとめ

初期のハワイ移民の文芸活動は新聞の発達に伴うものであった。発表の場を得て彼らは句作に励んだ。そして農村のエワでは指導者を得て結社が生まれ、都会では同好のものが結社を作った。初期の俳句結社が、エワという地方のプランテーションと、ホノルルやヒロという都会から生れたことは象徴的である。ハワイには、これ以降も地方の労働者の俳人たちと、都会の俳人たちの二つの流れが見られるからである。

二つの流れのいずれにも共通することは、この時代の移民は日本の歳時記の季題を用い、彼らの記憶の中の日本を詠う傾向があったことである。句を詠むことで遠い故郷を思い、慰めを得た。同好の仲間と集い、日本を思いながら句作をする時間は、彼らにとって心の「オアシス」であったといえよう。

2. ハワイ俳壇第一期黄金時代

2-1 『火星』と水無月会

1910年代、日本人人口に大きな変化があった。1908年から呼び寄せ移民の時代が始まり、ハワイ在住の肉親の招きで移住する若者が多くなった。また1909年の第一次オアフ島大ストライキを経て、プランテーションの日本人労働者数は減少に転じ、プランテーションを去って都会に住む傾向が強くなった。また1910年代までには日本人社会は安定した社会構造を持つに至った。浄土真宗本派本願寺を初めとするあらゆる仏教宗派がハワイ各島に寺院を展開し、ヒロ大神宮、ラワイ大神宮、ハワイ大神宮、出雲大社教等の神道もハワイに定着し、日本の宗教宗派は日本人移民の生活をさらに安定したものにした。各島各地区で日本語の新聞や雑誌が刊行され、教育の分野でも日本語学校の増加に伴い馬哇〔マウイ〕教育会や布哇教育会という教職者組織ができた。急激に増加しつつあった二世を、アメリカ市民として教育することを掲げた同化教育が唱導され始め、「日本人」学校は「日本語」学校へと衣替えし始めた。初期の日本人移民が錦衣帰郷を目的とした出稼ぎであったのに対し、1910年代はハワイ定住への移行期であった。

この時代を背景に俳句の第一期黄金時代がもたらされた。そのきっかけは1909年10月、増田玉穂によるハワイで最初の総合文芸雑誌『火星』の創刊であった¹⁰⁾。『火星』創刊当時、ホノルルに俳句結社は無く、ハワイ島のヒロ蕉雨会は停滞していた。エワ土曜会のみ活発であったが句作は惰性に陥っていた(元島「敬愛なる」、20-22)。増田はこの状況を打破したいという願望をもって『火星』を発刊した。それに協力したのが投稿句の選者を引き受けた奥村物外と元島明々であった。

『火星』が読者に投句の呼びかけをすると128句の応募があり、その中から36句が選ばれて第1巻第2号に設けられた「火星俳壇」に掲載された。第1巻第3号への投稿句数は二百を超え、女性の投稿も見られ、俳句熱に火がついた。第2巻第2号(通算第5号)の巻頭「再び本誌の主義」で増田は、『火星』が掲げる主義を再確認し、俳句について触れている。増田によると、『火星』発行の目標は増えつつある在留青年の文学思想を高めることであり、「火星俳壇」を設けたのはこれが平民の取りつきやすい形の文学だからであった。青年層を文学の道に誘ってその思想性を高めるには俳句が最適な形であるというのが増田の考えであった。その後投稿句の選者は、奥村物外が帰国で去り、青木虚舟¹¹⁾、伊藤花影、田島断が加わった。

増田は年長の俳人たちにも奮起を促した。第1巻第2号の「嚙」欄で増田は、「増給問題〔第一次オアフ大ストライキ〕以後布哇俳壇は事実上於て閉息したるなり今や増給問題は止みぬ借問す何すれば独り俳壇は復活せざるや」と問い、さらに「評者あり曰くホ府〔ホノルル〕俳人無精なりと知らず無精なりや論者ありいふヒロ俳人活気なしと知らず活気なきや…知らず評論遂に嚙語として絶るべきか反駁遂に嚙語をして止むべきか暫く目をつぐんで両地俳人のなす処を見んと欲す」と、ホノルルとヒロの俳人たちの奮起を促している(18)。そして第2巻第2号で、1年半前に起こしたものの数回で消滅してしまった「布哇十句集」を「火星俳句会十句集」として再興することを促した(「火星俳句会十句集」15)。この企画は青木虚舟、伊藤花影、元島明々を幹事とし、参加者が各自十句を投句して『火星』誌上に匿名で発表し、相互に投票して佳作を公平に選

出し、幹事の厳しい論評も公表し、俳壇の向上を図ろうというものであった。第一回の課題「柳」に、14名140句の応募があった（『第一回火星十句集』19）。さらに十句集再開の動きに刺激され、元島明々を中心に、ホノルルの同人8名によって俳句結社「水無月会」が再結成された（『会報欄』23）¹²⁾。『火星』は水無月会の同人たちの活躍の舞台となった。『火星』について、川添は以下のように評価している。「水無月会の作品を初め、青木虚舟、田島断、伊藤花影、元島明々、諸氏選になる応募俳句や、明々氏執筆になる『俳句新題』などが燦然と紙上をかざっているのである。…[1909-1910年]に真摯なる純文芸雑誌のあったのは、正に一つの驚異と云いたい」（『移植樹』319）。

『火星』は、一時期沈滞していた俳句熱をハワイ全島に復活させる役目を果たした。ホノルル水無月会の再結成をもたらしただけでなく、エワ土曜会を奮いたたせ、各地に新しい俳句結社を生み出した。当時の俳壇に及ぼした影響について、『火星』第2巻第6号の巻頭言「現在の布哇俳壇」が以下のように論評している。

現今布哇に於ける文学中最も盛んなるものは十七文字なりとす。

…ホノルルの俳壇は再び勃興して水無月会の再興を見るに至たり…このここに至りたるは実に火星俳壇の力大に與りたり。啻に火星は水無月会の再興を促したるのみならず、エワ土曜会を刺激し、村雨会を起さしめ、仏教青年会に句会を開かしめ更に各新聞の俳句募集の原因の幾分をなし、十句集に依って加哇ケカハの同士を立たしめ、独り俳壇のみは正に全盛の域に進まんとしつつあり。…(1)

ただし、ヒロ蕉雨会からの反応は思わしくなかったようで、「曾てヒロに蕉雨会なるもの生まれしも…今や遂に衰退の極に達し差しにも盛んなりしヒロ俳壇も、俳句の俳の字さえ云う者の稀になるに至れり…」と評している。

このように俳句再興の原動力となったものの、『火星』は1910年6月の第2巻第6号（通算9号）で廃刊となる。経済的な理由ではなかっただろうか。作品発表の場を失った水無月会の同人たちは、翌1911年3月、水無月会の機関誌として『ウキクサ』を発刊したが、こちらも翌年8号で廃刊となっている。その後さらに井田東華（王白石）によって総合文芸雑誌『高潮』が発行されたが、これも8号で廃刊となった。しかしその後も俳界の勢いは続いたようだ。相賀によると、「『高潮』は8号で廃刊となったが、文学熱は衰へず、殊に俳句熱は益々盛んになり、ヒロ市では、ホノルルから転じた前原一星、永見古萩、田中滴水等が主唱して、出川三茶、名草南浦、品川玉兔等と共に蕉雨会を起こし」たという（696）。ヒロに関する相賀の記憶には時代の混乱があるように見えるが、最終的に俳句熱はヒロにも波及し、ヒロ蕉雨会も活力を取り戻したことは次の齋藤芙蓉の証言から窺うことができる。1913年、齋藤がヒロの布哇殖民新聞入社後に蕉雨会に加入したとき、「当時の蕉雨会同人は松林露泉、名草南浦、永見古萩、出川三茶、前原一星、品川玉兔、菅井悠々、島田杉雨、吉川流水、有働風花の諸氏のやうに記憶して居る。」と述べており、そうとう有力な俳人たちが参加する活発な句会であったことがうかがえるのである（齋藤「ヒロ蕉雨会」）。

この時代にハワイ全島を舞台に「俳壇」とよべる集団が形成され、俳人たちのネットワークが築かれたようである。ホノルルの水無月会、村雨会、仏教青年俳句会の三社、エワのエワ土曜会、ヒロの蕉雨会の他に、「加哇島リフエに青蛙会あり、一方会名はないが、加哇島ケカハと、馬哇島

ワイルクにも俳句の集まり」があった（川添『移植樹』、319）。その他ワイパフには吉川流水を中心に結成された「素人句会」があり、二十数名が毎月句会を重ねたという¹³⁾。俳人たちの交流が盛んになり、俳句結社は連動して活動を展開した。たとえば、水無月会は「パラマの『鉄冷鉱泉』の階上で例会をひらいた。エワ土曜会からの参加もあった。」（ハワイ日本人移民史 506）。また吉川流水の素人句会はエワ土曜会との「合同夏期大会をワイパフ沖の料亭塩風呂で開催し、アイエアから鈴木残香、ホノルルから竹川河舟、古屋翠溪、エワから石栗奴の奴、島影芳竹、山口柏の家、松村孤松、五十嵐五十山らが参加して、48名の盛会となった」と記録されている（小林 40-41）。

2-2 布哇歳時記

第一期黄金時代のもう一つの果実は、『火星』に集う俳人たちのなかから生まれた『布哇歳時記』（1913）である。俳句には季題を使うという約束があり、歳時記は古来日本の関西で用いられてきた四季分類を土台にして編まれてきた。ハワイでもその歳時記が用いられ、例えば『火星』の募集句課題は日本の歳時記に則っていた。最初の5号分の課題を挙げておくと、「蜻蛉」「野分」「行年」「落葉」「蓬萊」「屠蘇」「燕」「若草」「梅の花」「朧」である。「蜻蛉」を除くと『布哇歳時記』に掲載されたハワイの季題ではない。ここからハワイらしい句が生まれてくるのは難しいといえよう。『火星』に掲載されている句のなかにハワイの生活に根ざした句は数えるほどしかない。1910年3月号の「春季雑吟」の中から、（A）日本的な句と、（B）ハワイ的な句の例を挙げておこう（15）。

- （A）里川に魚すくふ子や春一日 紫水
渡守呼ばばなき立つ雲雀哉 柏の家
蕪鍋の香ふ温泉宿や梅の花 竹涯
合羽干す垣の破れ目や露の臺 玉兎
- （B）子を持って移り住む庭や青マンゴ 一穂
山守る土人の老ひとり花をへや¹⁴⁾ 桑邨
片照の虹美しや残る雨 桑邨

ハワイの俳人の中から、ハワイにふさわしい季題を考えようという動きが出た。『火星』の第2号から元島明々が「俳句新題」と題して数題ずつ発表したのが始まりであった。明々はこの作業を、「根気にまかしてやって行く中には所謂布哇の新題も随分出来るだらうと思ふ」のべて開始した。彼は例えば、「雨季」（冬）、「まんご蓄む」（冬）、二番豆¹⁵⁾（晩秋）、感謝日（冬）のようなハワイ独自の季題を提示し、その季題を詠んだ例句を挙げた。その例句を挙げておこう（元島「俳句新題」、16-17）。

花摺りの壁紙しめる雨日かな 明々
遂に大木を捨てずまんごは蓄みけり 三巴
白癩のかくれ住む戸や二番豆 世子袍
子十人ありて感謝の夕かな 明々

しかしその後、『火星』の廃刊にともない元島はこの計画を放棄した。これは、長く継続することが容易な作業ではなかった。『布哇歳時記』は、最終的には早川鷗々が編纂し、田島断が手配

し、日本で出版された。その背後には田島の絶えることの無い働きかけと、俳人仲間の協力があつた。田島と早川の工夫で季題と例句を書き出すカードが用意され、120枚のカードの記入を経て、最終的な原稿は「…[教師をしていた] 田島断君が、布哇中学卒業生の母国見学団を率いて日本に行くことに決定し…[断君の要望で早川が] 十日間の休暇を、何処へも出ずに仕上げた」ものであつた(早川 1-9)。数年をかけてホノルルの俳人たちが苦闘して纏め上げた成果であつた。1913年出版の歳時記の内容は、新暦を使って一年を四季にわけ、ハワイ独特の季題を天文、地理、人事、動物、植物の順で格調高く克明に説明したものである。季題の説明が中心となっており、例句は多くない。1917年に増補版がハワイで出版されたが、こちらは例句をすべて削除している。

川添樞風はこのハワイ独自の歳時記の出版がハワイ俳句の一里塚であると高く評価し、「これまで布哇の俳句と云えば主として懐古的に日本に取材したが、ここに俳句の目が布哇の自然に向けられたという点で、これは布哇俳句界の革命であつた。」と述べている(『移植樹』335-6)。ハワイに住んでいても日本の季題を使い、実際の生活から乖離した俳句を詠んでいた移民たちが、ハワイの自然に目を向けるようになる契機となつたというのである。篠田も同意し、「ハワイの日本語文学を生み出すきっかけとなる点で重要である」と評価している(48)。これは1910年代の日本人移民のハワイ定住化の流れを反映したもので、文学の面でみられた文化変容の象徴的な事例であり、定住化時代にふさわしいハワイ俳句の誕生といえよう。ハワイらしい季題と例句を挙げておこう。

鳥々の震める山や珈琲咲く 増田玉穂 (春、花珈琲)

九重葛吹く風に定礎式果つる 早川鷗々 (春、ブーゲンビリア)

潮鳴りや一村のキャベ散り尽す 青木虚舟 (春、キャベの花¹⁶⁾)

朝風に着物の人や鳳凰花 田島断 (夏、鳳凰花¹⁷⁾)

水べりや時に穂蔗の影動く 元島明々 (秋、キビの穂) (小林 52-3)

興味深いことに『布哇歳時記』には『層雲』主宰者の荻原井泉水が序文を寄せている。井泉水とハワイの俳人との関係がいつどのように始まつたのか、また誰がどのような経緯で井泉水に「序」を依頼したのかに関しては確証がないが、著者の早川自身がすでに『層雲』の誌友となり投稿していたようで、その関係であつたと推察される(古屋『流転』、160)。井泉水は、ハワイに独自の歳時記が生れたことを賞賛し、「従来歳時記を唯一の標準とすることを捨てて、其土地に移つた人々が其処に親し[み]其処を研究した結果、其の歳時記を編むといふことは甚だ意義のある事だと思ふのである。」と述べている(3)。

『布哇歳時記』の出版がハワイ俳句の新たな礎になつたことは間違いない。『布哇歳時記』の定着によって、ホノルル水無月会のみならずヒロ蕉雨会も新たな一步を踏み出し、やがて第二期黄金時代を築くことになる。「抽象的日本趣味を捨て環境の自己を見出さんが為、専ら布哇歳時記の季題と趣味とを解するに」至るのである(出川 20)。

2-3 自由律俳句の流行

1910年代のハワイ俳壇にはもう一つの新しい風が吹いた。河東碧梧桐の新傾向や荻原井泉水の自由律が布哇にも波及したのである(ハワイ日本人移民史 506)。定型俳句のみだつたハワイに、

新傾向や自由律俳句が花開き、やがて多くの自由律句集が編まれた事は特筆に値する。相賀によると、その始まりは、「井田王白石〔東華〕が大陸から来て、その頃日本で碧梧桐が盛んに唱導しつつあった新傾向句を作り出し、俳壇にセンセーションを巻き起こした」ことにあるという(696)。ただし井田がいつハワイに来たのかは明確でない。新傾向や自由律俳句の「センセーション」はハワイの俳人たちのあいだに瞬く間に伝播し、定型俳句結社が自由律俳句結社に衣替えしたり、定型俳句の結社から離脱したりする人々が出て、自由律俳句の結社が次々に生まれた。『布哇歳時記』の早川鷗々や、他の水無月会の会員たちも新傾向に引かれていった(古屋『流転』、160)。相賀の記憶によると、8号で廃刊となったものの、井田王白石が文芸誌『高潮』を発行し、また「ホノルルでは、新傾向派の人々、河重夏月、見田眞砂、大久保紫水、脇本椰棕郎、古屋翠溪、青木虚舟等によってサウス会が組織され、同人雑誌「野の鶏」を発刊し、層雲派の新しい俳句を研究し始めた…」という(696)。

ハワイの俳人の多くが『層雲』に目を向けるようになった。創刊当時の『層雲』(1911年4月創刊)を紐解くと、第3巻第2号(1913年5月号)から、ハワイの「サウス会」がその「俳句会報」欄に顔を出すようになる。これは『布哇歳時記』の出版以前のことである。サウス会の会員として『層雲』に句が掲載されたのは、蘇雪、夏月、散骸、思桜、未済、湖月、村雲、翠溪、眞砂、宙夢、椰棕郎、雨圃子、碧朗、紫水、秋湖、かたほ、彩史、夢二の18名の多数にのぼっている。しかしサウス会は、3年後の第6巻第3号(1916年6月号)で『層雲』から姿を消す。そしてハワイの句会は「布哇俳句会」が1929年に登場するまで『層雲』に出てこない。しかしその間も、星野金雨花、古川文詩朗、井田王白石、見田宙夢、古屋翠溪、安積紫水、脇本椰棕郎らが個人で投稿を続け、「荻原井泉水選」で句が掲載され続けている。

ハワイで荻原井泉水の自由律が勢いを得たのはなぜであろうか。彼の自由律俳句は、俳句形式を破ってでも「詩」としての生命の中核を詠うことを重視する。5・7・5の制約に捕われない自由さが、新天地ハワイの自由な空気に合っていたのかもしれない。また「自然」を尊ぶ井泉水は、季題にこだわることによって生じる不自然な句作を避けるために、1912年に季題無用論を公にし、その後まもなく無季の句を容認するようになる。四季の変化のすくないハワイには、季題を使わない自由律俳句が普及する素地があったといえよう。『層雲』の名の由来―「自由の夏光耀の夏の近づき候際を以て出づる層雲」(荻原「編集室」)―のように、「自由」と「自然」がこの雑誌のテーマである。そして最終的には河野南畦が述べているように、ハワイで自由律が普及したのは「荻原井泉水の自由律俳句の理念『詩であって、そうして俳句』がハワイの風土に適合していたから」であろう(小林1)。『層雲』の自然主義は、ただ自然を写生するだけでなく、個人の内面や生活を率直に自然な感じで表現する「詩」であることを求める。そのため、『ホトトギス』などの句よりも移民たちの生活や社会を反映するものになる。例えば、丸山素仁が初めて『層雲』に掲載された自作の句―「朝からぬくい日があたり土橋繕ふなど」―について、「今考へると全くつまらない句だと思ふ。しかし、これは少しの偽りもない、裸の私を打出したものであって…私のすべてであると思ふのである。」と述べているように、生活の中から自然な句が生まれるようになったのである(丸山136-7)。小林は、自由律俳句を評して、「其の好悪は別として苛酷な労働の余暇に移民達が残した自由律俳句の中には、若々しい開拓者精神とベーススが滲み出て、流派を超えた共感と涙を誘うのである。」と述べる(小林6)。

最後にハワイ島ヒロの状況に触れておこう。自由律俳句の「センセーション」は、ヒロにも届いた。一時はヒロ蕉雨会の中にも自由律に引かれて転向した者が多かったという。齋藤芙蓉によると、蕉雨会でも「努めて破調の句を作句するやうになり、互選するに当たっても従来の正調では偶々佳句に押すべきものがあったとしても一概に『古臭い』と行って顧みる者がなくなって行った」ほどで、定型俳句を固守した品川玉兎はついに脱会するに至った。また齋藤芙蓉によると、「蕉雨会では〔早川鷗々の〕布哇歳時記によって盛んに層雲調の句を作った。最も早くから層雲調に心酔したのは永見古萩、名草南浦の両氏で次で一星、三茶諸子である。それがために従来の雅号では古臭いとでも思ったのであろう、一時は盛んに雅号までも変へたものである。…私は富岳を短歌に使用してゐた芙蓉に代へた。」という。残っている当時の句は、季題を使いつつも破調の新傾向の句である（「ヒロ蕉雨会」）。

水囊の水捨つ二階窓芒果〔マンゴ〕芽ぐ見し 古萩
 芒果芽盛りを晴るる雨に子連れ門売りが 南浦
 逸したるマイナ更に誹る斜陽芽マンゴに¹⁸⁾ 三茶
 奇しき丘にマンゴ芽榮を虹に暮る 芙蓉

しかし後述するように、一時の熱が冷めるとヒロ蕉雨会はまもなく定型俳句に戻っていった。

2-4 まとめ

ハワイの俳壇では、自由律俳句に転じる俳人と結社が多くあり、定型俳句の俳人や結社との間に対立状態が生じた。小林によれば、「時恰も日本では『新傾向』や季題無用論が台頭し、俳壇に新旧派閥の摩擦が顕著になった頃で、[ハワイの状況]も日本に於ける流派の離合集散の風潮を享けた過渡期の現象と見て差し支えない」。(小林 67-8)。

この時代は、ハワイ俳句の第一期黄金時代と呼ぶに値する俳句の勢いが強い時代であった。その特徴は、相次ぐ文芸雑誌・俳句同人誌の創刊と俳句結社の誕生であり、雑誌と結社という両輪がうまく連動したことである¹⁹⁾。もう一つの特徴は、ハワイの俳句がハワイの生活に根ざした新しい一步を踏み出した事である。定型俳句は、布哇歳時記の成立によってハワイ土着化という文化変容を起し、新しく導入された自由律俳句も、個人の生活や内面を詠う「詩」として俳句を捕らえることを強調することによって、ハワイの俳句の土着化を促した。

しかし文芸雑誌は長続きせず、俳句結社も短命に終わったものが多い（自由律俳句の結社—サウス会、海の雨会、夜の虹会—と雑誌は次々と生まれたが、いずれも短命に終わった）。また、俳壇は、奥村物外、元島明々、青木虚舟、早川鷗々らが帰国し、他の俳人たちも短歌等に興味を移したために勢いを失って、第一期黄金時代は急速に終わりを告げた。

3. ハワイ俳壇第二期黄金時代

3-1 日本との連携

日本人社会にとって1920年代前半は政治的に混乱の時代であった。1920年に第二次オアフ大ストライキが勃発し、排日の機運が高まり、日本語学校取締法が相次いで成立した。日本語学校全146校中88校は日本語学校取締法に対抗するためにハワイ政府を相手取って訴訟を起こしたが、

日本人社会はそれを支持する試訴派と反対する反試訴派とに分裂し、対立した。しかし1920年代後半になると、強い排日の動きは無くなり、日本人社会は落ち着きを取り戻した。1924年の移民法成立によって、新たな日本人移民は入国できなくなったため、ハワイ定住化の傾向に拍車がかかった。また日本語学校訴訟は1927年日本語学校勝利のうちに決着した。1930年代に入ると祖国日本の大陸進出に刺激されて愛国心が高揚し、日本への誇りから日本への留学熱もあがるなど、日本文化への傾倒がみられた。

上述のように俳壇は、1910年代末から1920年代前半にかけて、一時低迷した。1923年の同人誌『地響き』²⁰⁾の「文芸消息」が「ホノルル俳句界は近来余り奮わないようです。聊か短歌に圧倒された感があります。」と伝えている(59)。ホノルルでは短歌が開き、1913年の秋に尾籠狂花によってハワイ最初の短歌結社「みどり社」が創設されて以降続々と新しい短歌結社が創設され、「海角文芸社」、「銀草詩社」、「朱楽社」、「南国巡礼詩社」、「潮音詩者」と続いた。ヒロでも、新聞の歌壇で活動する「殉情詩社」と「海虹詩社」のほか、1923年には増田王穂、村上紅嵐、中林紅流、尾崎無音、川添樫風、齋藤芙蓉、田中滴水らによって「銀雨詩社」が創設され、歌壇隆盛の時代を迎えていた(川添『移民』、394)。

しかし日本人社会が安定した1920年代後半から1930年代になると、ハワイの俳壇は息を吹き返し第二期黄金時代を迎えた。その重要な特徴は日本俳壇の師系との繋がりにあった。1926年結成されたホノルルの布哇俳句会は『層雲』の荻原井泉水に、他方、定型俳句のヒロ蕉雨会は1930年以降『ゆく春』の室積徂春に師事した。ハワイの俳壇は日本の俳壇の一部となり、日本の句誌に定期的に投稿することが定着した。定型俳句も自由律俳句も、日本と繋がることによって、合競いあって発展していった。

3-2 自由律俳句と『層雲』

低迷を振り切るように、サウス会、海の雨会、そして夜の虹会の流れをひく自由律俳句の俳人たちは見田宙夢、井田王白石、古川文詩朗、古屋翠溪を中心として合同し、1926年新たに布哇俳句会を立ち上げた²¹⁾。1929年1月号の『層雲』の「通信」欄に布哇俳句会が登場している。サウス会が『層雲』から姿を消してから十年以上が経過している。布哇俳句会は「布哇層雲支部」を名乗り、メンバーとして白光、不二樓、三雄、森詠、素仁、隈畔、端月、王白石、翠山、翠溪、文詩朗、海馬石、宙夢、秋月、鳳村、水穂子、小三、里聲、精之介、溪水、夏月と21名を数え、毎月例会を開いていた。荻原井泉水は熱心にこれを指導し、1937年にはハワイを訪問して古屋翠溪や秦是道らとの交流を果たした。やがて井泉水の斡旋でハワイの自由律俳人たちは層雲社から次々と句集を出版することになる。そしてそのすべてに井泉水は丁寧な序文を寄せている²²⁾。

布哇俳句会の俳人たちは新しい俳句、新しい「詩」を作り出そうと真剣に挑戦し、一年後には『布哇俳句会第一年句稿集』を出版するに至った。初年度10回の句会の記録であるが、句が収録されている参加者は47名に達する²³⁾。この句集の「はしがき」からは、彼らの意気軒昂たる雰囲気伝わってくる。

布哇俳句会が、昨年二月孤々声をあげてから、丁度一ヵ年になる。此の短い期間に於ける同人の俳風は実に驚くべき変遷をなしている。それは、従来の遊戯的気分を含んでいた俳句から新しい文学としての価値ある句境に到るべく、その道程であったからであろう。此の過

渡期に於ける我々の作品は決して完全なるものではあるまい。中には佳句もあり、中には捨てたい句も多いであろう。併し全体を通じて我々の真面目な研究的態度は著れていると思う。…（布哇俳句会）

この句稿集の中から、ハワイの自然を謳った句、家族生活を謳った句、労働を謳った句をそれぞれ数句挙げておこう。「日本趣味」を脱してハワイの俳句となっており、自由律の新鮮さが伝わってくる。

植えし苗がひたひたと水に抱かる 見田宙夢 (1)

燃え洩る蔗殻や残雨煙る畑 佐藤三雄 (2)

看護疲れに鉢の花しほれては落つる 古川文詩朗 (13)

貧しさにも馴れて妻よ窓に物編める 町田田の人 (24)

暮れきった畑道に馬を追い戻す 川田きよし (24)

青田よりの風涼し蔗切りシタベ 川端端月 (47)

丸山素仁を中心としたもう一つの自由律俳句の流れがワヒアワ高原ワイピオで生まれた。ワイピオはホノルルから北西に内陸部に入った農業地帯で、パイナップル・プランテーションが開発されていた。蕉葉会という俳句結社があり、同人の中には丸山や秦是道のような農民がかなりいた。「始めは定型派で、素仁、三雄、鳳村、白光、利平、秋月、隈畔、蛙村、不二樓らが参加した。秦是道もちょうどドスコフィールドに移住した頃で、同人として参加した」(ハワイ日本人移民史 506)。

丸山は句集『草と空』の「あとがき」で、1927年にワヒアワの蕉葉会が自由律に転換し、高原吟社と改名した事情を書いている。新しい俳句を作ろうとする熱意が伝わってくる。

其後ふとしたことからホノルルの古屋翠溪氏を識った。…其時「新しい俳句」といふものを教えられたのだった。

俳句は、何よりも詩であることである。

俳句は、ただ俳句らしい形の一系列の文字であるだけではいけない。

其内に生命、その表現にリズム、しらべを持たなければならない。

懇々と説き聞かされた。我々はその熱意に動かされた。無限の未来性のある自由律俳句、日本の外にある日本人である我々にぴったりとくる、この新しい俳句の道を、我々はまっしぐらに進んで行かうではないか。翠溪氏の説く層雲道に共鳴した我々は、即座に蕉葉会を「高原吟社」と改めて、層雲に入り、其後は井泉水先生、並に翠溪氏の指導によって句作を続けてきたのである。

高原吟社の同人の多くは、ホノルルの布哇俳句会の句会にも参加しており、『布哇俳句会第一年句稿集』(1927)にも多くの名前をみることができる。高原吟社は1928年に独自に『高原吟社句稿第一巻』を出版した。古屋翠溪の選になる句集で、翠溪は「序」において、いかに自由律俳句が移民の実生活の真実をありのままに映し出しているかを指摘し、自由律の優越性を説いている。

…俳句はその詩形の短い関係からか、三十年も前から盛んに作句されていたが、未だに大した進歩を見ないのは何故であろう。古い俳句の約束や詩形が、熱帯地方であり且つ物質文明の最も発達したる当地には、適しないのではあるまいか。高原吟社同人が非常なる熱心と勇氣を以て、真剣に、日本の俳句でなく、我布哇の俳句の道を開拓せんと、男々しくも進出し

たるは、布哇俳句界の為、意義深き事である。…同人諸士が実生活から来る新鮮なる印象を、其まま表現すべく努力した作品である以上、古人の真似や文字の遊び事で奇麗に仕立上げた句より遥かに尊い記録である事は勿論である。

古屋が選んだ句はすべて移民の生活に根ざしたもののばかりである。その中には、労働を謳った句や、帰国する人に対する移民の揺れる心を詠った句などがある。

黙々と土に親しむ我なり 佐藤三雄 (2)

植へても終へぬ一日であった 平田鳳村 (32)

帰国人うらやみつつ貧乏してゐる 末谷白光 (18)

見ゆるまでハンカチ振って夕日の棧橋 菅野秋月 (19)

エワ土曜会のケースに対応するように、ワヒアワ高原吟社が農村の結社であったことは興味深い。農村地帯に石栗奴の奴や丸山素仁のような俳句の指導者が存在したのである。川添樫風は、「句集『草と空』の丸山素仁翁」と題して丸山素仁との交流を中心に、農民俳人丸山の人と句を紹介している。丸山はまずワイアルアのサトウキビ・プランテーションで労働者として働き始め、その後ワヒアワでパイナップル畑の開墾に挑戦したもののパイナップル価格暴落で資産を失い、ワヒアワで百姓として出直した頃、定型俳句の蕉葉会に誘われた(丸山 136)。

素仁・丸山宗作翁…明治39年(1906)7月23日、一家再興のため、壮年30歳で来布、布哇在住51年間。

私が日布時事の文芸欄を担当した頃、それは1929年頃と思うが、其頃ワヒアワに自由律俳句の、生れたばかりの高原吟社があった。

草の実の散る音を聞いたり、草の渋で手を黒く染めたりなど、じっと自然に親しむ土の俳人をその中に発見して、私はひそかに敬慕の念を禁じ得なかった。それが素仁翁であった。

…

素仁翁は戦争直前『草と空』と云う布哇では最初の句集を出し、自由律俳人としては一家をなした。…

翁は昭和の初めの頃、同志と共に蕉葉会と云う定型俳句の結社を作っていたが、古屋翠溪氏の導きで自由律に入り、後には先生の翠溪を凌駕するに至ったことは、これは翠溪氏の述懐。…

大ていの事は聞き流しにして草をとっている

余生果樹を育て葉が散れば葉を掃いている (川添『移植樹』、465-7)

3-3 定型俳句と『ゆく春』

自由律に風靡されたヒロ蕉雨会は徐々に衰退し一時は休眠状態に陥ったが、同人の中から再興の声があがった。齋藤芙蓉によると、ホノルルから増田玉穂がヒロに転居し、脱会していた品川玉兎が戻り、前原一星や齋藤芙蓉、出川紫洞、田中滴水、大久保紫水、古屋静雅が加わって、ヒロ蕉雨会は再び定型俳句を掲げて再興されたという(「ヒロ蕉雨会」)。出川紫洞が回顧するところによると、「我々も一時『層雲』にかぶれた。が、俳句は俳句であって、川柳を持って来て俳句と誰が認めるか…」(齋藤「外国」、43)。定型俳句の視点からすると、自由律俳句は俳句ではなかった。

時は恰も明治四十二〔1909〕年前後の当時とて、母国の俳壇には所謂新傾向の勃興するあり。碧梧桐、一碧樓、の諸氏により海紅層雲を通して、盛に天の一方に新旗幟を翻し…吾蕉雨会同人も暫く是が渦中に投ずるの已むなきものありしが、而も蕉翁の植えなしたる根幹は、牢乎として抜くべくもあらず。忽ち新傾向の渦中を脱して再び蓑蟲の古巢に帰り抽象的日本趣味を捨て環境の自己を見出さんが為、専ら布哇歳時記の季題と趣味とを解するにいたれり。

(出川 20)

その後再び勢いを失った一時期があったが、1920年代中頃から定型俳句の中核となる俳人が次々と参加して、ヒロ蕉雨会は隆盛期を迎えた。新たに参加した人の多くは銀雨詩社の歌人たちであった。「尾崎無音、川添樞風、中林紅流、古屋静雅、村上紅嵐（五橋城）、末岡夕鳥、重兼花雪らの名がみえる」（ハワイ日本人移民史 7）。その頃のヒロ蕉雨会はヒロ日本人社会のエリート層を引きつけ、同人にはヒロ市の名士が名を連ねた。ヒロ市『布哇毎日』社長の徳城為風、ホノルルでも開業したことのある写真師の永見古萩、ハワイ生まれの二世の市民権証取得の世話人であった名草南甫、新聞記者や日本語学校教師をしていた田中滴水、『布哇朝日』の主筆だった増田王穂、商店員の新谷黙星、カポホ日本語学校の教師だった島田東風、法律家の川崎緑星、共に教育家だった田原弦波と齋藤芙蓉、森杉医院の薬剤師の大門赤帯、ヒロ大神宮宮司の合志蘇川、そしてヒロ大正寺の住職だった洪川大嶺らである（川添『移植樹』、289-90）。

しかしヒロ蕉雨会は自由律俳句に対抗するだけの方向性を見出せずにいたらしい。出川は、「楫なき洋上の小舟か、将、無風帯に漂う帆船の夫れか、同じ処を往きつ戻りつ、徒に暗中摸索に耽り、然も猶自己陶醉に慢座す。其危険。」と振り返っている。その行き詰まりを打開したのは、1930年、室積徂春の『ゆく春』との出会いであった。「…幸いにして現俳壇の傑物室積徂春先生に拾はれ、始めて、前途に一条の光明を認め得たり」（20）。

自由律俳句の布哇俳句会が『層雲』と繋がって発展したように、ヒロ蕉雨会の俳人たちも日本の俳壇に解決の道を探り、室積徂春の『ゆく春』に目を留めた。室積徂春は、高浜虚子率いるホトトギス派に属し、かつて『ホトトギス』の編集に携わっていたが、写生万能の作風にあきたらなくなり、自分の思想を生かした主観句に傾倒していき、1927年『ホトトギス』を離れて『ゆく春』を起こし、独自の古典的新生に到達した俳人である。ハワイの俳人が『ホトトギス』ではなく『ゆく春』に惹かれた理由は、写生主義を脱した室積徂春の句風にあったのではあるまいか。

ヒロ蕉雨会と東京の『ゆく春』との繋がりがどのように始まったのか、その契機については明確なことは分らないが、現在の『ゆく春』主宰者である山形輝夫氏によると、「新聞に掲載された『ゆく春』誌の広告を見て、前原一星すなわち後の横山松青が申し込んだと聞いている。」とのことである（山県）。横山も句集『アイカネ』の「後記」で「俳句の批評添削にも応ずるとの新聞記事を見て遂に此会に入会して徂春氏の指導を受けることとなった」と書いている（304）。また、齋藤芙蓉の回顧によると、「一進一退、遅々として進まざるの時、偶最古参の出川紫洞氏により『ゆく春』主幹徂春先生の峻烈なる句評の紹介あって以来、我が蕉雨会同人一同は初めて光明を発見したのであります。それまで日本各地の俳誌も相当に来て居りましたが『ゆく春』を手にして初めて我等同人の眼が醒めたのであります。」（「布哇」、74）とある。創刊から4年目というごく初期の『ゆく春』に参加したことになる。ハワイから投稿された俳句は、「船便で往復し、[室積徂春の]添削を受けた。他に娯楽があまりない時代で、添削された句がゆく春に掲載されるのが

楽しみだったのだと思う」(山県)。

『ゆく春』との繋がりが始まってから6年後、ヒロ蕉雨会の指導者のひとり村上紅嵐は、『ゆく春』との出会いがもたらした効果の一つとして、ハワイの生活に根ざした徹底したローカル色をもつハワイ俳句になったことを挙げ、次のように評価している。「今日の布哇色豊かな俳句から、過去を顧ると全く感慨無量である。夫れも、ゆく春に徂春先生の指導をうけるようになって、生活に即した、ローカルカラーの句を作り出すようになったものではある」と(27)。室積徂春がローカル色を重要視したことは、『ゆく春』誌上に村上の「解説布哇歳時記」が数回にわたって掲載されていることからわかる²⁰⁾。1932年『ゆく春』の「室積選雑詠」に掲載された句の中から、ヒロ蕉雨会のローカル色豊かな移民生活を描いた句を挙げておこう。

一斉に倒れし甘薯や秋出水 村上紅嵐 (1月号、92)

煤けたる厨にほどく目刺かな 末岡夕鳥 (5月号、107)

釈迦に似る布哇土人や仏生会 品川玉兎 (6月号、77)

朧夜や蔗の中なる移民塚 末岡夕鳥 (7月号、68)

茄子苗にばかりとぎ汁そそぎけり 佐藤芳山 (7月号、73)

椰子の影のびし夕日の植田かな 齋藤芙蓉 (9月号、66)

盆提燈異国の空に仰ぎけり 古屋静雅 (11月号、76)

児を抱いて盆提燈を見回りぬ 立原鳴夕 (11月号、101)

村上が指摘するもう一つの効果は、『ゆく春』を舞台に全日本帝国の同人たちと対等に交流することによって、ハワイの俳人が日本人であることを再認識したことである。村上は「ゆく春雑詠は私達同人 [が] 毎日紙上で握手して居る道場なのだ。北海道も台湾も布哇も満州も私達には距離なんか絶対に存在しない…」と述べた(27)。またハワイの俳人たちは、日本の文化をハワイの地に広めているというパイオニア意識をもった。「…これが[ハワイにおける]日本文化促進の先駆と言ふも敢て差支なからう。その先駆者をして今日あらしめたのは何と言っても、『ゆく春会』を通しての徂春先生の指導による賜物である事を、我が『ゆく春会』同人中一人として疑う者はない」(齋藤「外国」、42)。日本を知らない二世たちにも俳句という日本文化が伝達された。村上紅嵐の指導で生まれた曹洞宗ヒロ大正寺の青年俳句研究会には二世が参加していた。村上は言う。「…俳句はやはり日本人の血の中にあるのだと思ふ。夫れは私が若い方を集めて共に研究して居る、小さい句会があって、椰子樹茂れる海浜に吟行する事もあるが、此の若人の会員は十七名で、其の内には、布哇で生れて、布哇から足一歩も踏み出した事のない、所謂二世の青年が数名居る。此の若人の句も一二句ずつゆく春の雑詠にも入選するようになった。」と(村上27)。

ヒロ蕉雨会に関して特筆すべきことは、同人たちが俳句の伝播に熱心でハワイ島各地に次々と「ゆく春」結社を生み出したことである。『ゆく春』に記された発展の経過によると、1935年には「我等の同信紅嵐が大正寺青年俳句会を起し、且つ指導し、夕鳥が出張の便宜はあるとは言へ七十哩もの遠方にハマクア俳句会を起こしこれを指導し、紅流と夕鳥とが約九十哩の遠方にコハラ俳句会を起して指導」した(齋藤「外国」、42)。翌1936年、さらに句会は増え、「ホノカアゆく春会、コハラ潮風会或はワイメアゆく春会、ホノムゆく春会等々…吾ゆく春会の旗下に集り、毎月、紅嵐、夕鳥及紅流の諸氏より、夫々適當の指導を」受ける状況となった(出川21)。ヒロ蕉雨会は『ゆく春』の中では「布哇ゆく春会」を名乗り、ハワイ島のゆく春グループの要となった。1936

年には合同の「布哇島俳句大会」が2回も開催され、50名を越す参加者があった(齋藤「外国」、42；藤井豊村 40)。ヒロ蕉雨会の古参同人である古屋静雅も、そのような情熱と向上心について証言している。「…私は常に同志精進の旗持ちだけはつとめて来た。その旗持ちは忙しい家業の余暇に誰れ彼れと捉へて先輩の句、自分の句、貰った短冊などを示しては案内役に邁進自負していた。」と(「私の感激」60)。その熱意の結果ハワイ島は定型俳句の牙城となり、1936年には、「同志が年々歳々増加して来て、第二世諸氏も馳参じ今や百余名に達した」と記録されている(60)。

一方、ホノルルでは自由律俳句が隆盛で、定型俳句が育たなかった。「我が布哇でも首府と言はれるホノルルには『海紅』調の布哇俳句会なるものがある。このほかに正調派が生れても途中で影を没してしまふ。それは正調派が少ないのと、昔日本でやった事がある位の老人のみだから理論が確然としていない。それでいつしか破れてしまふ」(齋藤「外国」、43)。そのような低迷を破って、ホノルルに定型俳句の新しい組織「青夏吟社」が生まれたのは、1939年であった。ヒロからホノルルに移った前原一星(横山松青)や岩下涛声が創設に加わっている。前原はヒロ蕉雨会を『ゆく春』に導いた人物であり、岩下はハワイ島カムエラに「ゆく春」支部を創設して1938年にホノルルに転居した人物である。他に、水無月会の流れを汲む元山玉菘、エワ土曜会の流れを汲む渡辺芳月らが加わった。青夏吟社は『ゆく春』の一員となり、これによってハワイの定型俳句は『ゆく春』に統一されることになった。

3-4 まとめ

この時代は、ハワイ俳句の第二期黄金時代で、自由律俳句と定型俳句が共に栄えた時代であった。この繁栄をもたらした要因の一つは日本の俳壇との繋がりであった。日本との繋がりがハワイ俳壇を育成した功績は大きい。逆説的であるが、日本の俳壇の一部となることによって、ハワイの俳人はハワイの生活体験に根をおろした句作を求められ、ハワイ俳句の独自性を確立したといえよう。この時代の日本人移民はすでにハワイに定着しており、彼らはハワイの自然や生活を詠うことによって、より一層ハワイに適応することになった。

このような日本との繋がりにはどのような意味があったのだろうか。ひとつには、ハワイの俳句結社が成熟し、句作のレベルを上げるために、さらなる向上を目指して日本の師系の指導を求めたこと。そして結果として多くの句集の出版をみることになった。次に世界の大国となった祖国日本に、日本人としての意識が高揚し、日本文化への志向が強まった時代の反映であったことを挙げることができよう。彼らが「日本文化促進の先駆」となって、俳句の伝播に努めた事は、30年代の高揚した日本人意識の反映と見ることはできるのではあるまいか。

結語

初期のハワイにおける日本人移民は、厳しい労働の中で俳句を詠み始めた。5・7・5の短詩型文学は庶民に手の届く文学であった。石栗奴の奴のような俳諧の教養と指導力のある人物を核として、俳句結社が生まれていった。新しい環境におかれて苦闘した移民たちは、故郷や祖国への切ない望郷の念をこめて日本趣味の俳句を詠み、そして句会に参加して友人を得ることによって大きな慰めを得た。

初期の俳句は、ハワイに生きる移民たち自身の生活から乖離した面があった。日本趣味の俳句では、彼らの日常を文学に昇華させることはできなかった。日本趣味に留まった大きな理由は、彼らの意識が故郷日本を離れておらず、日本の歳時記を使ったことにあった。荻原井泉水が次の様な適切な指摘をしている。

[本土を離れた遠い島や植民地に住んでゐる人々は、] 従来の歳時記に記されている因習的な感じに従って製作をするだけに甘んじ、自分の生きている空気から得る本当の感じを表現するといふことを試みてゐないやうに見える。それには単に因習に甘んじてゐるといふ事の外に、その人々が故山の温和な土地と其風物とに対する憧憬が、知らず知らず句作の上では実生活を離れて暫くでも故郷の印象の追憶に慰めやうとするが為なのではないか。(荻原「序」、1-2)

ハワイ移民の定着時代に俳句の第一期黄金時代を迎えるころ、日本人移民はハワイの俳句を詠うようになった。俳句には季題を詠むという約束があり、ハワイという風土でその約束をどのように守るかが鍵となった。ハワイに定住して生活が安定してきたとき、俳人たちは徐々にハワイの自然観察や生活体験の中から生まれてきたハワイらしい句を詠むようになり、その積み上げのなかから「夜の虹（春）」「草絶ゆる（夏）」「蔗秋」といったハワイ独特の季題が認識されていった。その集大成である『布哇歳時記』の完成は、日本人移民がハワイという風土に適應した文化変容を象徴していた。荻原井泉水はハワイ歳時記の成立によって、単なる祖国憧憬や慰めの俳句を脱し、真の芸術としての俳句が誕生したことを意味することを指摘し、以下のように述べている。井泉水ならではの指摘といえよう。

…俳句といふものが一種の憧憬文学、若しくは郷土文学に過ぎぬものではなく、人々が日々の実生活から来る新鮮な印象を表現するに足りる一つの詩形である以上は一慰安の具となすよりも、一つの芸術として立つべきものである以上は一人々が現に経験してゐる現象の中から立派な俳句が出来る筈であるし、又それに依ってこそ人々の生活が芸術的に強く生きて来るべきではあるまいか。(1-3)

移民たちは「実生活から来る新鮮な印象」—美しいハワイの自然、厳しい労働、貧しい日常生活など—を詠うようになった。ハワイに根を下ろした生活を詠うようになり、日々の喜び、悲しみ、辛さや貧しさを詠うようになると、俳句は移民たちにとって、現実と折り合いをつけてハワイにおける生活に適應していく手段ともなった。丸山素仁は人生を振り返って、「三十五年働いた布哇を想ふ。ああ、苦闘の三十五年であった。よくぞ堪えてきたことだと思ふ。その苦難の日々をなぐさめ、ともするとくづをれさうになる心を励まし、力づけ、なごませてくれたものは、層雲の俳句の道であった。」と感慨をのべている(138)。

また移民たちは同じ趣味の仲間を得て句会を組織し、ハワイ各島で発行される日本語新聞の文芸欄や文芸雑誌を通して、また俳句結社間の交流を通して、「ハワイ俳壇」のネットワークを作り出し、リーダーシップを発揮する場を得た。学識者の渡航が多くなり、また日本で俳句を嗜んだ者たちのなかから、農村地帯にも、都会にも、宗匠格のリーダーたちが生まれた。

第二期黄金時代になると、ハワイ俳壇は日本の流派と強く結びつき、太平洋を越えて流派の主宰に句の添削を受けるようになった。日本俳壇の一部に位置づけられることによって、彼らはローカル色豊かな独自の俳句を確立していった。彼らが結びついたのが、『ホトトギス』の高浜虚

子ではなく、『層雲』の荻原井泉水と『ゆく春』の室積徂春であったことは興味深い。両者が共に、客観写生ではなく、生活から生まれる真の声を捕らえた俳句を強調する流派であったことは単なる偶然ではなく、ハワイの移民たちが客観写生以上のものを求めていたということであろう。齋藤芙蓉は、『ホトトギス』に惹かれなかった理由を、次の様に表している。「虚子先生の渡仏日記の中の句の中には徂春先生の評せられる『報告終り』『ニュース』句の頗る多きを拝誦させられて、『ホトトギス』誌と『ゆく春』誌のレベルの差を痛切に味はせられました。」と（「虚子」61）。ハワイ移民の俳句は、ハワイの自然と生活を詠う手段として定着し、戦前に彼ら独自の形を持つようになったといえよう。

注

- 1) 本論は平成18年度科学研究費補助、基盤研究C（一般）「俳句、和歌、川柳を媒体に表象されるハワイ日本人移民の社会史的・文化史的研究」の研究結果の一部である。
- 2) 彼らの中に農民は少なく、ハワイのプランテーション労働に適應せずに帰国や大陸転航した者が多く、また後続の移民がなかったため、ハワイで日本人社会を形成するにいたらなかった（『ハワイ日本人移民史』265）。
- 3) 移民人口の統計には多少の差がある。ここにあげた数字はハワイ政府の発表によるものである（『ハワイ日本人移民史』166）。
- 4) 篠田左多江によると、1895年2月5日の『やまと新聞』には「文苑」欄があり、短歌や漢詩などが掲載されている（42）。
- 5) 石栗の親友で本名は秦堪助。21歳でサトウキビ・プランテーション労働者として移民。自由律俳句に移った際に俳号を是道と変えた。『漂泊』（1959）を出版。
- 6) 「夏稼ぎ」は夏季休暇中に学生がアルバイトをして学資を稼ぐこと。
- 7) 冬の農閑期に農村では青年の間で俳句の勉強が流行した。俳句の「運座」「聯板会」のような楽しみも行われた（古屋『流転』、157-9）。現在のハワイゆく春グループの最長老90歳を越えた神田鳥村氏もそのような農村青年として俳句を始めたという（神田）。
- 8) 創設の年についてはさらに異論がある。川添は1903年に創設されたとする（『移植樹』289）が、横山松青は1904年とする（横山 303）。齋藤芙蓉が出川紫洞から聞いた話では、創立時の会員として木公舎半六、松林露泉、平井鬼木、野沢斯山の名が挙がっている（齋藤「ヒロ蕉雨会」）。中野は前原一星（横山松青）も1903年にホノルルからヒロに渡ってきて参加したとするが（Nakano）、横山本人は創設が1904年で自分は翌年の1905年に参加したと述べている（横山 303）。この結社は、第2次世界大戦中は句作を休むが、現在まで活動を続けている大変珍しい存在である。筆者は2006年9月にハワイ島に調査に向いたとき、この句会に出席させてもらった。
- 9) 後にホノルルに戻り水無月会を組織（1908）。その後ホノルル青夏吟社に参加。戦時中は本土の収容所に抑留された。戦後布哇タイムスの新年俳句選者。句集『アイカネ』出版（1960）。
- 10) 本名は増田貞太郎。増田はかつてヒロ蕉雨会の同人であり、『布哇朝日』の主筆を勤めた人物である。
- 11) 青木虚舟は『ホトトギス』に投句して虚子の添削を受けていた。例えば『ホトトギス』第15巻第11号（1912年8月）、101ページ。「村雨会」という俳句結社を創設したがこの会は短命に終わった。後に青木は自由律俳句に転じる。
- 12) 最初の会合に参加した氏名は、李兵衛、花影、鷗々、玉穂、虚舟、断生、明々、十雁の8名。水無月会のメンバーは「宗教家、教師、銀行員、新聞記者といったような比較的インテリ階級の人達」であった（古屋『流転』、159-60）。伊藤花影は記者、早川鷗々は正金銀行員、田島断は布哇中学教師、元島

明々と灰田十雁は医者である。

- 13) 定型俳句。創設の時期は不明。吉川流水はワイパフ学園の教頭で、『ホトトギス』に投句して虚子の指導を受けていた（小林 40-41）。
- 14) オヘヤは喬木で夏に赤い花が咲く。桃位の赤い実をつけ、市場で売られる。
- 15) 二番豆はキャベの木が晩秋につける二番目の豆で、やせて細長く、ポツリポツリと落ちる。冬の季題である。
- 16) キャベはマメ科の喬木で肉厚の羽状の小さな葉をつけ、春に毛虫形の褪黄色の花が咲く。
- 17) 鳳凰木はマメ科の熱帯性高木で、夏に紅色で5弁の大型の美しい花をつける。
- 18) マイナはハワイ諸島でよく見かける小型の鳥。
- 19) 晩鐘会と云う文学青年団の機関誌『晩鐘』は、1920年（大正9年）8月15日に第一号を出している（『移植樹の花開く』383）。
- 20) 『地響』は地響同人の機関誌で非売品。編集者には兄玉修三、見田宙夢、嘉数南星、山下草園、豊平走川、吉田のぶじの名がある。
- 21) 主な俳人は、古川文詩朗、丸山素仁、見田宙夢、秦是道、河重更涼、新庄青涯、平海馬石、河重十九子、古溝南郊、古屋翠溪、秦不二夫である（相賀 696）。
- 22) 丸山素仁『草と空』（1941）、見田宙夢『椰子と白雲』（1956）、古屋熊式『古屋翠溪句集 流転』（1958）、秦是道『漂白』（1959）、平海馬石『第五十の星』（1962）、河重更涼『虹が合唱する』（1962）。
- 23) 10回の句会のうち7回以上参加したのは、古川文詩朗、見田宙夢、古屋翠溪、井田王白石、福山溪水、内藤草一郎、角田北の人、藤原聡雨、三田翠山、丸山素仁、平田鳳村、佐藤三雄、秦不二樓、東海林隈畔、後藤蛙村、菅野秋月の16名で、そのうち丸山素仁以下の7名は高原吟社の同人である。その他、複数回に参加した者は12名。1回のみ参加者は9名で、エワの石栗奴の奴の名前も見える。
- 24) 『ゆく春』に昭和9年末から11年初めにかけて断続的に掲載されている。

引用文献

「文芸消息」『地響き』第三輯（ホノルル、地響詩社、1923年5月）ガリ版印刷。

「第一回火星十句集」『火星』vol. 2, no. 4（Apr. 1910）。

出川紫洞「祝 ゆく春十周年」『ゆく春』（1936年10月）。

藤井秀五郎『新布哇』（東京、文献社、1900）。

藤井豊村「布哇俳句大会の記」『ゆく春』（1936年11月）。

古屋静雅「私の感激」『ゆく春』（1936年10月）。

古屋熊式『古屋翠溪句集 流転』（鎌倉、層雲社、1958）。

「現今の布哇俳壇」巻頭『火星』vol. 2, no. 6（June 1910）。

秦是道『漂白』（鎌倉、層雲社、1959）。

早川直（鷗々）編『布哇歳時記』増補版（ホノルル、便利社、1917）。

布哇高原吟社『高原吟社句稿第一巻』（ホノルル、布哇高原吟社、1928）。

ハワイ日本人移民史料刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』（ホノルル、布哇日系人連合協会、1964）。

布哇俳句会『布哇俳句会第一年句稿集』（ホノルル、布哇俳句会、1927）。

「会報欄」『火星』vol. 2, no. 3（Mar. 1910）。

『火星』v. 1-9（1909年10月～1910年6月）（ホノルル、火星社）。

「火星俳句会十句集」『火星』vol. 2, no. 2（Feb. 1910）。

川添樫風『移植樹の花開く—ハワイ日本人史落ち葉籠』（ホノルル、「移植樹の花開く」刊行会、1960）。

_____『移民百年の年輪』（ホノルル、移民百年の年輪刊行会、1968）。

神田鳥村インタビュー（ホノルル、神田鳥村宅、2007年8月2日）。

高原吟社『高原吟社句稿—第一巻』（ホノルル、高原吟社、1928）。

- 小林荔枝『布哇俳壇史』（近代文芸社、1991）。
- 増田玉穂「嚙」『火星』 vol. 1, no. 2 (Nov. 1909)。
- _____「再び本誌の主義」『火星』 vol. 2, no. 2 (Feb. 1910)。
- 丸山宗作『草と空』（鎌倉、層雲社、1941）。
- Nakano, Jiro. “Tanka Poets of Hilo: A History of Hilo’s Issei Poets.” *Hawaii Herald*, 8:14.
- 村上紅嵐「感じた儘の戯言」『ゆく春』（1936年10月）。
- 元島明々「敬愛なるエワ土曜会員諸氏に與ふ」『火星』 vol. 2, no. 5 (May 1910)。
- _____「俳句新題」『ゆく春』 vol. 1, no. 2 (Nov. 1909)。
- 荻原井泉水「編集室より」『層雲』創刊号（1911年4月）、表紙裏。
- _____「序」早川直編『布哇歳時記』改訂版（ホノルル、便利社、1917）。
- 齋藤芙蓉「外国に伸び行く日本文化」『ゆく春』（1935年8月）。
- _____「布哇ゆく春会」『ゆく春』（1936年10月）。
- _____「ヒロ蕉雨会の変遷」『火山』（1931年1月1日）。
- _____「虚子の著・井泉水の講話」『ゆく春』（1937年10月）。
- 篠田左多江「黎明期のハワイ日系日本語文学—尾籠賢治を中心に—」『移民研究年報』13：41-58（2007）。
- 白水繁彦『エスニック・メディア研究—越境・多文化・アイデンティティ』（明石書店、2004）。
- 相賀安太郎『五十年間のハワイ回顧』（ホノルル、『五十年間のハワイ回顧』刊行会、1953）。
- 山県輝夫氏インタビュー、（東京、山県輝夫宅 2006年9月20日）。
- 横山松青『アイカネ』（ホノルル、青夏吟社、1960）。